



Title	熱病エーピアロスのアラビア語表記の類型化：ディオスコリデス『薬物誌』とガレノス『熱病の種類について』の場合
Author(s)	澤, 裕章
Citation	アラブ・イスラム研究. 2021, 19, p. 69-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106149
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

熱病エーピアロスのアラビア語表記の類型化： ディオスコリデス『薬物誌』とガレノス『熱病の種類について』の場合

澤 裕章*

Categorization of Arabic *Ēpialos*: A Case Study on Dioscorides' *De materia medica* and Galen's *De differentiis febrium*

This paper aims to categorize Arabic transcriptions of Ancient *Ēpialos* (Gr. ἑπιάλος) in Dioscorides' *De materia medica* (Ar. *Kitāb al-ḥashā'ish*) and Galen's *De differentiis febrium* (Ar. *Kitāb aṣṇāf al-ḥummayāt*). The disease was described as a phlegmy characterized by having simultaneous heat and rigor. Ḥunayn ibn Ishāq, the translator of both works, rendered this Greek medical term and chose to transliterate it, bringing out a variety of transcriptions. This study classified the two transcriptions into two criteria: the transcription of π and that of inflection. Thus, this study offers a chart where the transcriptions of *Epialos* are divided into nine groups. This classification throws a doubt on the previous lemma of *De differentiis febrium* and suggests the possibility of a manuscript where the writing style of *Ēpialos* differs from the one surviving.

凡例

- 本稿におけるアラビア語のローマ字転写は『岩波イスラーム事典』に従う。
- 生没年はヒジュラ歴による表記はせず、西暦のみ記す。
- 以下に挙げる文献は、指定した形式で参照箇所を示す。
 - 『薬物誌』の参照箇所は、Max Wellmann (ed.). *De materia medica*. 3 vols. Berolini: Weidmann, 1906-1914 での巻表記と項番号に従う。例えば、第2巻11項の場合、II, [11]と表す。
 - ガレノスの著作の参照箇所は C. G. Kühn (ed.). *Claudii Galeni Opera omnia*, 22 vols. Lipsiae: Cnoblochii, 1821-1833 に従って、(巻数 頁 K) と表記する (例：第5巻11頁= V 11K)。
 - 『医学集成』の参照箇所は、*Kitāb al-ḥawī fī al-ṭibb*. 20 vols. Hyderabad al-Dakkan: Maṭba‘a Majris Dā‘ira al-Ma‘ālif al-‘Uthmānīya, 1955-1967 での巻数とページに従い、「巻数：頁」と表記する。その際、巻数はローマ数字とする。例えば、6巻176頁は VI:176 と表す。

* 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 修士課程 (2021年3月31日現在)

- 写本の参照箇所は folio 番号と左右 (r/v) を表記する。
- 翻訳中の筆者による補足は〔〕で示す。
- 人名や書名は慣例的な表記があれば、それに従う。それ以外の場合は、カタカナ表記の後に原語の表記あるいはそのローマ字転写を付す。ただし、原語の表記については、註で示すものもある。
- 本文中で引用した箇所には、各作品で適宜、記号と数字を割り当てた。

略号

ca.	約、～年頃
d	没年
s. p.	sine punctus
u. v.	ut videtur

序論

体の発する熱が病と密接に関わることは古代から知られており、熱に関する研究が盛んに行われてきた。ギリシア医学を代表するヒポクラテス（前5世紀頃）やガレノス¹（122–216/7）は熱病について数多くの著作を残しており、ローマ皇帝ネロの軍医として活躍したとされるディオスコリデスも『薬物誌』（*De materia medica*）²の中で、熱病の治療に用いる薬草を複数挙げている。

8世紀頃からアッバース朝で行われた大規模な翻訳活動により、中世イスラーム世界では、シリア語を経てギリシア語で培われた科学的知見が流入し、インドやペルシアなど東方地域の医学も組み込んだ「アラビア医学」³が成立した。「アラビア医学」は、その後着実な発展と普及をみせ、ラーズィー（Abū Bakr Muḥammad ibn Zakariyā' al-Rāzī, ca. 854–925/935）⁴やイブン・スィーナ（Abū 'Alī al-Ḥusayn ibn 'Abd Allāh ibn Sīnā, 980–1037）⁵といったイスラーム世界のみならず、翻訳を通じてラテン世界へも影響を与える人物を輩出した。彼らもギリシアの医師らと同じく、熱病に大きな関心を寄せ、自身の著作の中に熱病に関する章や巻を設け、先人たちの主張を引用しながら、臨床経験による知見や治療法を記録した。ラーズィーの『医学集成』（*Kitāb al-hāwī*）や、イブン・スィーナの『医学典範』（*Qānūn fī al-ṭibb*）はその代表的な例であろう。⁶

¹ Nutton, *Ancient Medicine*, 226–227; L. Edelstein and V. Nutton, 'Galen,' *OCD*, 621.

² Gr. Περὶ ὕλης ἰατρικῆς.

³ 本稿では中世の科学文献が主にアラビア語で書かれたことを念頭に置き、中世イスラーム世界で興隆した一連の科学体系を「アラビア科学」と呼ぶ。Cf. Browne, *Islamic Medicine*, 2.

⁴ Cf. L. E. Goodman, 'al-Rāzī,' *EI2*, Vol. 8, 474–477.

⁵ Cf. A.-M. Goichon, 'Ibn Sīnā,' *EI2*, Vol. 3, 941–947; Gutas, *Avicenna and the Aristotelian Tradition*.

⁶ ギリシア語からシリア語およびアラビア語への一連の翻訳活動の詳細は、グタス『ギリシア思想』、モンゴメリ『翻訳のダイナミズム』第一部第三章、Dols, *Medieval Islamic Medicine*, 3–9、

イスラームが出現する以前から、アラビア語には咳や熱といった基本的な病気を表す語彙が存在したものの、より詳細な疾患の種類や治療法を表す用語は発達していなかった⁷。そのため、医学を受容する中で、言語体系が全く異なるギリシア語の用語をいかにアラビア語に取り入れるかは、翻訳者にとって重要な課題であった。そこで彼らは翻訳に際して、1. 相当するアラビア語の単語に訳す、2. 翻訳借用 (loan translation/calque)、3. 音訳 (transliteration) といった工夫を施すことで、問題を乗り越えようとした。

第一の手法は、起点言語 (source language) の語彙を、目標言語 (target language) で対応するものに置き換えるというものであり、最も単純な翻訳方法の一つである。これは、ギリシア語でハチミツを表す μέλι をアラビア語の ‘asal に翻訳するものが例として挙げられる。

二つ目の翻訳借用とは、Vinay and Darbelnet によれば、「ある言語が別の言語から表現を借用しつつ、各要素を逐次的に翻訳する特殊なタイプの借用」⁸である。例えば、ギリシア語で脱毛症の一種を表す ἀλωπεκία はキツネを意味する ἀλώπηξ に由来し、これがアラビア語では dā’ al-tha‘lab、つまり「キツネの病」と、ギリシア語の要素をアラビア語に置き換えて翻訳されている⁹。

最後の音訳は、アラビア文字でギリシア語を再現する手法である。この方法は中世の翻訳、特にアッバース朝後期の天文学文献の翻訳では好まれていた¹⁰。また医学文献の翻訳においても、音写は頻繁に用いられた手法であり、アヘンを意味するギリシア語の μήκων を mīqūn と表記するなどが例として挙げられる。

しかし、言語的な隔たり、特に音声面での違いが顕著なギリシア語を、アラビア語で再現するのは至難の業であった。特にアラビア語にはない母音や子音を再現するには、アラビア文字を一定の規則に従って組み合わせる必要があった。先に挙げたアヘンの音写でも、アラビア語には存在しない e の長母音は ī で代用されている。

また、アラビア文字は形の似た文字が多く、またその区別をつけるための記号類が写本では省略される傾向にあるため、後世になると、ギリシア由来の単語が元々の音を反映しない表記で伝えられることが多くなっていた¹¹。Pormann and Savage-Smith は、音写が抱える「こうした潜在的な曖昧さによって、特に音写が幅を利かせる医学物質の分野における同定作業に深刻な問題をきたす」と指摘している¹²。

Pormann and Savage-Smith, *Medieval Islamic Medicine*, Cap. 1 (esp. 9–29)を見よ。

⁷ Pormann and Savage-Smith, *Medieval Islamic Medicine*, 31.

⁸ Vinay and Darbelnet, *Comparative Stylistics*, 32.

⁹ Pormann and Savage-Smith, *Medieval Islamic Medicine*, 31.

¹⁰ モンゴメリ『ダイナミズム』、182頁。

¹¹ 例えば、ギリシア語で「脳炎」を意味する φρενίτις は、一般的にアラビア語で فرنيطيس と転写されるが、語頭の fā’ を qāf に置き換えた قرنيطيس という形も見られる。同様の現象は、形の似ている nūn (ن)、tā’ (ت)、thā’ (ث)、bā’ (ب)、yā’ (ي) でも確認できる (Pormann and Savage-Smith, *Medieval Islamic Medicine*, 32)。

¹² Pormann and Savage-Smith, *Medieval Islamic Medicine*, 32.

この問題を解決するには、Dubler and Terés が述べているように、ギリシア語とアラビア語の対応関係を検証し、判別記号の書き違えを常に修正する必要がある¹³。そのための前段階として、両言語間での表記の対応関係の整理と提示が挙げられる。

そこで本稿では、ギリシア医学用語の一例として熱病エーピアロス (ἑπιάλος) を取り上げ、アラビア語での音写法の分類を試みる。これにより、エーピアロスを転写する際に正誤問わず、どのような表記が存在しうるのか、そして複数の写本を参照することでどのようにしてその表記が生まれたのかを明らかにしたい。

ただし、著者や時代によって転写の仕方が大きく変化すると考えられるため、本稿が研究対象とする文献は同一人物による作品が望ましい。そのため、本稿はフナイン・イブン・イスハークによって翻訳された『薬草の書』(Kitāb al-ḥashā'ish) および『熱病の種類について』(Kitāb aṣṇāf al-ḥummayāt) における表記に焦点を当てることとする。

本稿は2章構成である。第1章では、エーピアロスがどのような熱病として理解されてきたかを、ギリシアと中世イスラーム世界に活躍した医師たちの発言を基に整理する。第2章では、エーピアロスのアラビア語転写について、ギリシア文字とアラビア文字の対応関係と、ギリシア語の活用語尾の転写に着目して分類する。

議論に入る前に、本稿で使用する校訂本と写本に触れておきたい。『薬物誌』については、Wellmann による校訂版を参照する。『熱病の種類について』のギリシア語を参照する際は、Kühn による校訂版を用いる。アラビア語のテキストについては、以下のリストに示した校訂本および写本を中心に議論する。なおエスコリアル図書館 (la Biblioteca de El Escorial) と Majlis 図書館の写本を参照できなかったため、本稿では必要に応じて校訂本の註での表記を採用した。

■『薬草の書』

校訂本 (=Dubler and Terés 版)

Dubler, C. E. and Terés, E. *La versión árabe de la 'Materia Médica' de Dioscórides (texto, variantes e índices). Serie: La 'Materia médica' de Dioscórides, Transmisión medieval y renacentista*. Vol. II. Tetuán y Barcelona, 1952—1957.

写本¹⁴

◆M = Madrid, Biblioteca Nacional de Madrid, MSS/5006, before 1210?.

◆P = Paris, Bibliothèque nationale de France, MS arabe 2849, 1219.

¹³ Dubler and Terés, *La 'Materia Médica'*, Vol. II, XXVII.

¹⁴ Dubler は校訂にあたって、M 写本と P 写本以外にも、San Lorenzo, la Biblioteca de El Escorial, Ms. 845 (Cf. Renaud, *Les Manuscrits arabe*, 53)を参照している。

■『熱病の種類について』¹⁵

校訂本 (=de Stefani 版)

de Stefani, C. *Kitāb aṣnāf al-ḥummayāt; De differentiis febrium libri duo arabice conversi*. Edited by. Pisa: Fabrizio Serra Editore, 2011.

写本

- ◆L = London, British Library, Or. 6670, 3, (1184).
- ◆S1 = San Lorenzo, la Biblioteca de El Escorial, arab 797, 1 (March 1217).
- ◆S2 = San Lorenzo, la Biblioteca de El Escorial, arab 849, 3 (1296).
- ◆S3 = San Lorenzo, la Biblioteca de El Escorial, arab 860 (n.d.).
- ◆Mj = Teheran, Majlis 6410.

1. 熱病の医学的伝統とエーピアロス

1.1.ギリシア医学

古代ギリシアにおいて、兆候としての熱と症状としての熱は区別されておらず、しばしば両者が重複して理解されることもあった¹⁶。ギリシア医学における熱病の分類は、ヒポクラテスの『伝染病』(*De epidemiae*) に端を発する。彼は症状が現れる日数を基準にして、熱病を持続熱、毎日熱、三日熱、四日熱などに分類し、熱病ごとに症状の軽重や予後の様子を解説している¹⁷。また彼の症状記録では、患者の熱病がどのように進行しているかが克明に記されており、その意味で「熱病はヒポクラテスの『伝染病』においてとりわけ重要視されていた病気」であった¹⁸。彼は、乙女に月経が現れないときの病、あるいは男性が罹る風土病の一つとして、エーピアロスを挙げている¹⁹。

ヒポクラテスの医学を継承したガレノスは、『分利について』(*De crisis*)²⁰、『熱病の種類について』、『分利の日について』(*De diebus decretoriis*)²¹といった著作で詳細に熱病について論じている。彼は熱病についてもヒポクラテスと同様に、周期性や分利²²のタイミングに着目しつつ、自身の医学理論の基礎となった四つの体液

¹⁵ Wernhard はここに挙げた5種類以外にも Teheran Majlis 3999, pp. 486 - 514; 522 - 556 (略号 N) を挙げている。個々の写本については、Wernhard, *Über die Arten der Fieber*, XIX-XXII を見よ。

¹⁶ Sajadi et al., “Akhawaynī,” 976.

¹⁷ Hippocrates, *De epidemiae*, 670-674.

¹⁸ マターン『ガレノス』、129-130頁。

¹⁹ Hippocrates, *De superfoetatione*, 506; Hippocrates, *De aere aquis, locis*, 18.

²⁰ Ar. K. *al-buḥrān*. Cf. Ullmann, *Medizin*, 43.

²¹ Ar. K. *ayyām al-buḥrān*. Cf. Ullmann, *Medizin*, 43.

²² 高熱が急に平熱に戻ることに。

に基づいた分類も行った²³。彼は熱病をある病の症状ではなく、悪寒、寒気、汗、熱っぽさなどの症状を発する独立した病気と見なしていた²⁴。

ガレノスはエーピアロスを毎日熱 (Gr. πυρετός ἀμφημερινός / Ar. ḥummā yawm) に分類し、以下のように解説している。

(G1) 先に挙げたことに対して、先述の熱病の兆候は、病の分利において燃えるような症状や、エーピアロスの症状 (中略) を発生させることである。²⁵

(G2-1) この種類 [=毎日熱] には、固有にエーピアロスと呼ばれる熱病がある。熱と悪寒が同時に起きて、体の全ての部位で同時に両方を感じる場合に [は、エーピアロスである]。

(G2-2) アルキゲネース²⁶はエーピアロスという名前が、この熱病以外では誰からもそう呼ばれていないと考えている。²⁷

(G3) 悪液質や熱による悪液質から生成される [熱病が] エーピアロスである。私は、いつでも両方 [熱と悪寒] が起こる熱病をそう呼ぶ。それは悪寒がまず先導し、熱が後に続くものである。²⁸

と述べている。二つの記述からガレノスが、エーピアロスに罹ると熱と悪寒が同時に現れることを最大の特徴として認識していたと言える。

独特の症状を持つエーピアロスであるが、ギリシアではガレノス以前から治療に用いる薬品やその利用法が知られていた。『薬物誌』には、「ヒヨス (ύοσκούμος) の薬を3枚あるいは4枚、ブドウ酒とともに飲めば、エーピアロスという熱病を治る²⁹」

²³ Bynum and Nutton, *Theory of Fever*, vii–ix.

²⁴ マターン 『ガレノス』、129–130; Siegel, *Galen's System*, 273. Cf. Galen, *De medendi*, XI 17K.

²⁵ Galen, *De Differentiis febrium*, VII 309K. «ἐπὶ δὲ τοῖς εἰρημένοις γνωρίμασι τῶν προκειμένων πυρετῶν ἐστὶ καὶ τὸ κατὰ τὴν ἀκμὴν τοῦ παροξυσμοῦ προδείξαι τι σύμπτωμα καυσῶδους πυρετοῦ. καὶ μέντοι γε καὶ τὰ τῶν ἡπιάλων ...»

²⁶ アバメアのアルキゲネース (Gr. Ἀρχιγένης) はシリアのアバメア (Gr. Ἀπάμεια) 出身の医師で、トラヤヌス時代 (r. 98–117) のローマで活躍した。ガレノスの脈に関する理論は彼に影響を受けている。Cf. Ullmann, *Medizin*, 69–70; GAS, vol. 3, 61–63; Ross and Nutton. 'Archigenes,' *OCD*, 145.

²⁷ Galen, *De differentiis febrium*, VII 347K. «Τούτου τοῦ γένους ἐστὶ καὶ ἡπιάλος πυρετὸς ἰδίως ὀνομαζόμενος, ὅταν ἅμα πυρέττουσιν τε καὶ ῥιγοῦσιν, καὶ ἀμφοτέρων αἰσθάνονται κατὰ τὸν αὐτὸν χρόνον, ἐν ᾧ παντὶ μορίῳ τοῦ σώματος.»

²⁸ Galen, *De inaequali intemperie*, VII 751K. «σύνθετος δ' ἐκ ταύτης ἐστὶ τῆς δυσκрасίας καὶ προσέτι τῆς τῶν πυρεττόντων ὁ ἡπιάλος. οὕτω δ' ὀνομάζω τὸν πυρετὸν ἐκεῖνον, ὃ διὰ παντὸς ἀμφοῦ συμβέβηκεν· ὃ δὲ ἡγεῖται μὲν ῥίγος, ἔπεται δ' ὁ πυρετός, ...»

²⁹ *De materia medica*, IV, [68]. «τρία δὲ ἢ τέσσαρα ποθέντα σὺν οἴνῳ ἡπιάλους πυρετοὺς θεραπεύει.»

とある。さらにディオスコリデスは「〔トルディリウム³⁰〕はワインと一緒に飲めば、エーピアロスに対して、有効である³¹」とも述べている。

1.2. アラビア医学

それでは、中世イスラーム世界にエーピアロスはどのように伝承されていたのか。序論でも述べたように、中世イスラーム世界では科学の受容・発展には翻訳者が大きな役割を担っていた。その中で最も有名なのは、ヒーラ出身のキリスト教徒、フナイン・イブン・イスハーク（Ḥunayn ibn Ishāq al-‘Ibādī, d. 873）であろう。医師でもあった彼は非常に多作な翻訳家であり、弟子のステファノス（Iṣṭifan）とともに、『薬物誌』を『薬草の書』として翻訳し、アラビア医学に大きな影響を与えた³²。しかし、彼が特に重要視されるのは、ガレノスの医学書を翻訳した業績にある。彼は自身が翻訳したガレノスの著作をまとめており³³、その中で『熱病の種類について』を *Kitāb aṣnāf al-ḥummayāt* として紹介している。

以下に引用した三つの文章は、『熱病の種類について』のフナイン訳を邦訳したものである。H2-1とG2-1を比較すると特に顕著であるが、フナインはギリシア語の文構造を理解しながら、アラビア語へ丁寧に移し替えている。

（H1）それに関する我々の言葉が、我々の説明したものと一致するこれらの熱病の兆候は、熱病に見舞われる一定期間中、燃えるような熱の症状や、患者が熱とともに寒さを感じる、ギリシア人がエーピアロスと呼ぶ熱病の症状が（中略）現れるというものである。³⁴

（H2-1）この種類には、エーピアロスという名で呼ばれる熱病もあり、それは人が一度に熱と悪寒がして、両方を体の各部分で同時に感じるというものである。

（H2-2）アルキゲネース（arkhijānus）の見立てでは、この名前は一つまりエーピアロスという名前のことだが—を元々与えられていたのは、こうした熱病以外の決して何物でもなかった。³⁵

³⁰ セリ科の植物。Gr. σέσελι; 学名: *Tordylium officinale*.

³¹ *De materia medica*, III, [53].

³² 正確には、ステファノスが翻訳したものを彼が訂正したと伝えられている（Sadek, *Arabic Materia Medica*, 7–8）。『薬物誌』の翻訳に関しては、Sadek, *Arabic Materia Medica*, Chap. II が詳しい。

³³ Cf. Bergsträsser, *Ḥunayn ibn Ishāq*; Bergsträsser, *Neue Materielen*.

³⁴ de Stefani, *De differentiis*, 53. (i. e. Galen, *De differentiis febrium*, VII 309K).

³⁵ de Stefani, *De differentiis*, 75. (i. e. Galen, *De differentiis febrium*, VII :347K).

(H3) 腐敗物が二つ〔＝酸性の粘液とガラス質の粘液〕と混ざると、その二つによって、罹った人物が悪寒と熱 (al-ṣālib) を身体の全ての部位で同時に感じるが、それはギリシア人がエーピアロスと呼ぶと私が述べた熱病である。³⁶

また『薬物誌』に記されていたエーピアロスの治療法は、中世イスラーム世界にも継承されていた。『薬草の書』を見ると、ヒヨスの葉を「三枚か四枚の量、ワインと一緒に飲むと、エーピアロスと呼ばれる熱病を治す。それは悪寒と熱が同時に生じる熱病である」³⁷という記述があり、トルディリウムを用いた処方もアラビア語に翻訳されている³⁸。

それでは、中世イスラーム世界の医師たちはエーピアロスに関するガレノスの主張をどのように受容したのか。ラーズィーは『医学集成』の情報のおよそ8割をギリシア由来の文献から引用し、その多くがガレノスの著作に依拠している³⁹。彼が熱病について詳細に論じた『医学集成』第16巻でも、エーピアロスの症状について、サーヒル⁴⁰やイブン・マーサワイヒ⁴¹といった後世の人物から引用しているが、以下のようにガレノスの著作を典拠とした記述が大半を占めている。例えば、以下の R1 には H2-1の一部が含まれている。

(R1) この種類にはエーピアロスが含まれる。これは人間が同時に熱と悪寒を感じるものであり、いくらかの腐敗が混じった酸性ないしガラス質の粘液に似ている。⁴²

(R2) ガレノスが『原因と症状の書』⁴³で曰く、ガラス質の粘液は一部が腐敗して、一部が腐敗せず残留すれば、そこからエーピアロスと呼ばれる熱病が発生する。⁴⁴

³⁶ de Stefani, *De differentiis*, 76. (i. e. Galen, *De differentiis febrium*, VII :349K).

³⁷ Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, Vol. II, 335. “idhā shuriba min-hu miqdār thalāth waraqāt aw arba‘a [sic.] bi al-shirāb abr’a al-ḥumā al-latī yuqālu la-hu ibiyālus wa hiya ḥumā ya‘raḍu fī-hā bard wa ḥarr ma‘an.”

³⁸ Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, Vol. II, 265.

³⁹ Kahl, *Sanskrit Syriac and Persian*, 62.

⁴⁰ Yūsuf al-Qass al-Sāhir (ca. 10c). Cf. *GAS*, vol. 3, 268–269; Ullmann, *Medizin*, 124.

⁴¹ Abū Zakariyā’ Yūḥannā (or Yahyā) ibn Māsawayh (777–857). Cf. J. -C. Vadet., ‘Ibn Māsawayh.’ *EI2*, vol. 3, 872–873; *GAS*, vol. 3, 231–236; Ullmann, *Medizin*, 112–115.

⁴² *al-ḥāwī*, XVI:134.

⁴³ 『原因と症状の書』(*Kitāb al-‘ilal wa al-a‘rād*) は、アレクサンドリアで成立したガレノスの著作集。『病の種類について』(*De morborum differentiis*)、『病の原因について』(*De causis morborum*)、『症状の種類について』(*De symptomatum differentiis*) の各1巻と『症状の原因について』(*De symptomatum causis*) 3巻の計6巻からなる。Cf. Ullmann, *Medizin*, 42; *GAS*, vol. 3, 89–90.

⁴⁴ *al-ḥāwī*, XVI:151.

これらの記述から、ラーズィーもエーピアロスが熱と悪寒を同時に感じさせる熱病で、ガラス質の粘液により体の一部が腐敗する作用を持つと理解していたことが分かる。

一方イブン・スィーナーは『医学典範』第4巻において、「体内では冷たく、体表では熱い熱病に関する節」を設け、エーピアロスに関して次のように記述している。

これはガラス質の粘液によって体内で発生するものである。その在処である底部は冷たいが、それには腐敗が生じ、いくらか蒸気が広がり、体表で腐敗と分裂、炎症を起こす。⁴⁵

以上をまとめると、中世イスラーム世界においても、エーピアロスは熱と悪寒を特徴とする熱病として理解されていた。これは、ギリシアの医師たちの意見と一致しており、エーピアロスの存在や特徴が伝承されたと言えよう。それでは、次章以降では、著作ごとのエーピアロスのアラビア語転写のバリエーションを把握するとともに、それらの類型化を試みる。

2. エーピアロスのアラビア語転写

2.1 『薬草の書』

すでに述べたように、ギリシア語とアラビア語では母音や子音の違いを補うため、ギリシア語をアラビア語へ転写する際には工夫が必要であった。議論へ移る前に、その方法がどのようなものであったかを示しておきたい。

まず、母音の転写では多くの翻訳者が、アラビア文字の組み合わせることで、ギリシア語の母音を再現している。表1は Dubler and Terés 版『薬草の書』で示されている、ギリシア語の母音のアラビア語転写の対応関係をまとめたものである。ここではギリシア語の単母音全てと二重母音の内、エーピアロスに含まれる *ia*、そしてエーピアロスの活用形に現れる *ou*、*oi* の主な転写を記載した。ここで示す規則は、全ての写本で適用することはできないが、フナインによるギリシア語のアラビア語転写の傾向を見定める指針として有用であろう。

ギリシア語の母音を転写する際には、単語内での位置によって転写法が異なっている。例えば、*η* は語頭では *اي* もしくは *اي* と表記されるが、語末では *ي* と転写され、さらに語中においては、*ي* か *ي* と転写されるほか、完全に母音が表示されないこともある。この点で最も種類が多いのが、*u* で語頭では4通り、語中で3通り、語末で2通りと計9通りの表記法があり、また二重母音の場合にはさらに数が増える。

⁴⁵ [Rome], 23; [Baghdad], Vol. 3, 43; [Latin], Liber IIII, Fen I, Tractatus II, Cap. 49.

【表1 ギリシア語とアラビア語の転写の対応関係（母音）】

位置 母音	語頭	語中	語末
α	اとإ	無表記、ا	ا
ε	اとإ	無表記、ا	ا
η	إとا	無表記、ا ڤا	ى
ι	إとا	無表記、ڤا	ى
ο	اとو、ときおり و	無表記、و	و
υ	اとوまたはإときおり يو	無表記、و ڤا	一般的にはى、時々：و
ω	またはا	無表記、و	و
ια	يا		
οι	ا، او، و، ي، وي		
ου	و		

Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, II: XLVII–XLVIII, LI–LII を基に筆者作成。

続いて子音ではどうか。エーピアロスには、π、λ、ς の三つの子音が含まれている。表2は、これらの子音の『薬草の書』におけるアラビア語転写を示したものである。『薬草の書』での π の転写は、アラビア文字の bā' か、fā' かの二つに分類できるが、両者に厳密な区別はない。次に、λ については全て lām に置き換えられている。残るシグマは、語中に含まれる場合と、語末にある場合で書き分けられる。しかし、アラビア語での転写では、位置による変化が存在せず sīn で転写されることが多い。ただし Dubler and Terés によれば、語中では zayn、語尾では šād で転写されることもある。⁴⁶

最後に、ギリシア語の格変化がどのようにアラビア語に反映されたかについて述べておきたい。『薬草の書』ではアラビア語転写の際に、ギリシア語の格が維持されることは稀であり、多くの場合、主格で転写されている⁴⁷。例えば、『薬物誌』第4巻の「ヒヨス」の項では、エーピアロスは θεραπεύει の目的語として、複数対格の ἡπιάλους をとっており、表1に従えば、アラビア語転写は لوس となるはずだが、どの底本でも語尾は لس であり、原語の格は反映されていない⁴⁸。

⁴⁶ Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, Vol. II, XXXIV–XXXV.

⁴⁷ Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, Vol. II, XXVIII.

⁴⁸ Cf. Dioscorides, *De materia medica*, IV, [68]; «τρία ἢ τέσσαρα ποθέντα σύν οἶνῳ ἡπιάλους πυρετοῦς θεραπεύει.»

【表2 ギリシア語とアラビア語の転写の対応関係（子音）】

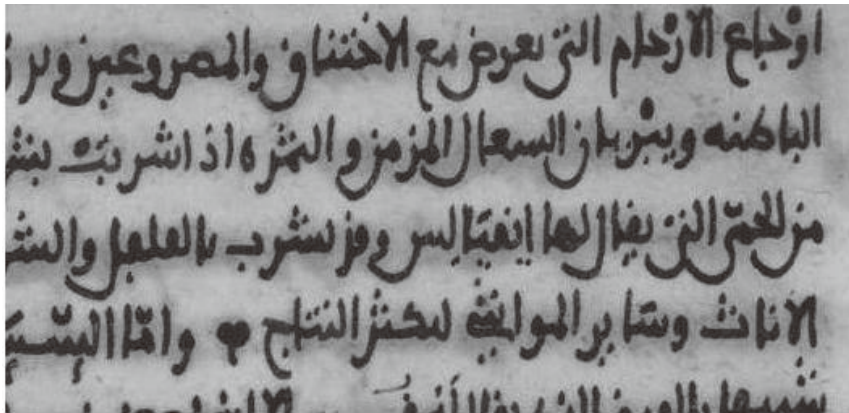
位置 子音	語末	語中	語頭
λ	ل		
π	ب / ف	ب / ف	ب / ف
σ/ς	س / ش / ص	س / ش (ز)	س / ش / ص

Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, II: XXXIV–XXXV を基に筆者作成

それでは、ここからエーピアロスがどのように転写されているかを検証する。最初に取り上げるのは、『薬草の書』である。先述のように、当該文献でエーピアロスについて言及があるのは、第3章53節の「トルディリウム」と第4巻68節「ヒヨス」の二つである。

まず、前者に関して、Dubler and Terés はエーピアロスの転写として、*ايقيالس*と校訂しており、異読について言及していない⁴⁹。しかし、彼が底本に設定した M 写本では、エーピアロスは *ايقيالس*と転写されている。 π が *fā'*に置き換えられているのを除けば、この箇所での各文字の対応関係は、表1に挙げた頻出するパターンから外れていない。またこの写本では、一部の単語にシャクル (*shakl*) が付されており、エーピアロスには二番目の *yā'*と *lām* に、それぞれファトハとカスラが記されている(図1)⁵⁰。アラビア語写本では、文字判別の点(ヌクタ)が書かれていないものも多い中、明確に読み方を示しているのは特徴的である。

【図1 M 写本におけるエーピアロス (III, [53])】



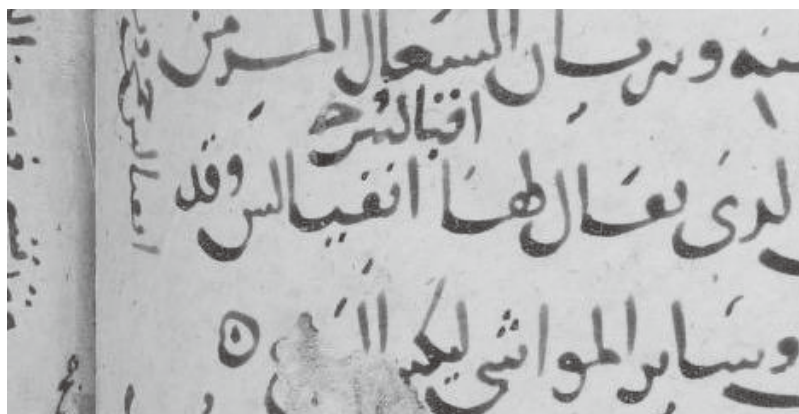
注記：al-maqālat, Madrid, Biblioteca nacional de España (Biblioteca digital Hispánica): MSS 5006, f. 67r より一部抜粋。上から三行目六番目の単語がエーピアロスである。
*yā'*の上部にファトハが書かれている。

⁴⁹ Dubler and Terés, *La 'Materia Medica'*, Vol. II, 265.

⁵⁰ Madrid 5006, f. 67r.

一方、P 写本では、エーピアロスはانفيالسと表記されており、シャクルは書かれていない(図2)⁵¹。注目すべきは、alif と fā' の間に nūn が含まれている点である。エーピアロスの原綴りでは、v の文字は含まれておらず、アラビア語に音写した際に v に相当する nūn が現れるのは不自然であるが、この表記は後述の校訂本や写本でも確認できる。これは、yā' が形の似ている nūn と誤読されたことで生じた誤記であると考えられる。

【図2 P 写本におけるエーピアロス (III, [53])】



注記：Le Traité, Paris, Bibliothèque Nationale de France, MS arabe 2849, f. 65v より一部抜粋。

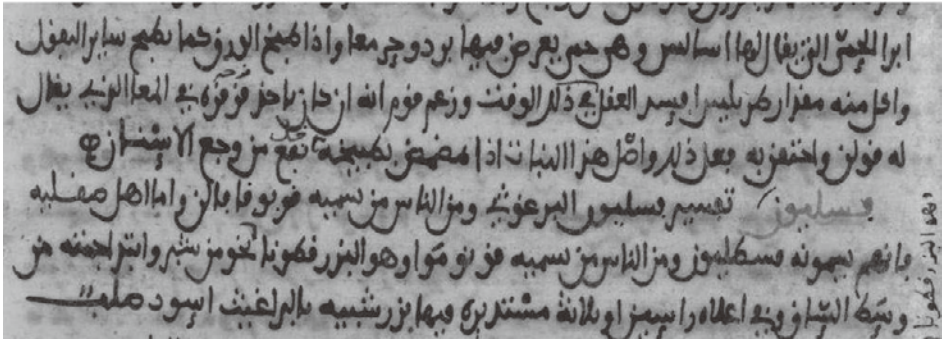
次に「ヒヨス」の項における転写を検証する。Dubler and Terés は校訂に際して、エーピアロスの表記をبيالسとし、語頭の alif が省略された形を採用している。この形は今回の分析対象とした他の文献では見られないもので、先に示した表1における η の転写には示されていない転写法である。

M 写本での表記を見ると、当該箇所のエーピアロスはاسالسと書かれており、isāls とも読み取れる(図3参照)⁵²。しかし音や文字の形を考えれば、π に相当する箇所がアラビア語で sīn と誤記される可能性は非常に低い。この表記は、写本が伝えられていく中で、点のない yā', bā', yā' の文字列が sīn の一文字として認識され伝えられたと考えられる。

⁵¹ Paris 2849, f. 65v.

⁵² Madrid 5006, f. 91r.

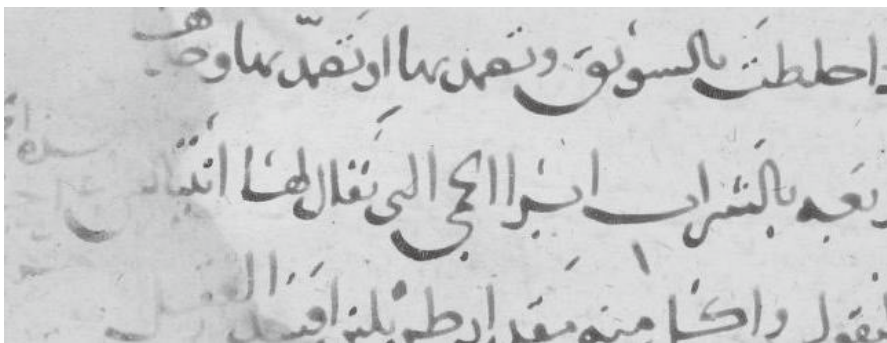
【図3 M 写本におけるエーピアロス (IV, [68])】



注記： al-maqālat, Madrid, Biblioteca nacional de España (Biblioteca digital Hispánica a): MSS 5006, f. 91r より一部抜粋。一行目中央右寄りに *asals* という単語がある。この写本では *sīn* の下に、アルファベットの *s* が併記されている（例：六行目左の *asod*）。

それでは P 写本のヒヨスの項において、エーピアロスはどのように書かれているのかは、図4を参照されたい⁵³。当該箇所は母音記号が併記されておらず、判読が明瞭な語頭の二文字は、*alif* と *nūn* である。以降の部分は文字が不鮮明ではあるが、判読するならば *yā'*、*alif*、*lām*、*sīn* である。なお、*nūn* と続く *yā'* の間の箇所は、山の上部に点が二つあることから、*tā'* とも解釈できるが、この文字列がエーピアロスを意味するのであれば、*tā'* が入り込む余地はない。すなわち当該箇所でのエーピアロスは *anīyals* と転写されている。

【図4 P 写本におけるエーピアロス (IV, [68])】



注記： Le Traité, Paris, Bibliothèque Nationale de France, MS arabe 2849, f. 89r より一部抜粋。二行目左端がエーピアロスである。

⁵³ Paris 2849, f. 89r.

表3は、M 写本、P 写本、Dubler and Terés 版におけるエーピアロスの転写をまとめたものである。全ての文献で共通した転写は、ギリシア語の α 、 λ 、 ς に対応する部分で、それぞれ $y\bar{a}'$ と alif, $\bar{l}\bar{a}m$, $\bar{s}\bar{i}n$ に置き換えられており、『薬草の書』では、どの写本でも格変化が主格で転写されていた。一方、文献間での違いとして目に付くのは、まず η の転写である。繰り返すが η のアラビア語転写は、一般的に alif もしくは alif と $y\bar{a}'$ を組み合わせることで表される。しかし、P 写本では $y\bar{a}'$ が $n\bar{u}n$ として解釈されている。詳細は後述するが、この表記は『熱病の種類について』でも確認できる。

次にエーピアロスが現れる箇所によって、 π の表記が異なる点にも注目したい。トルディリウムの項では π が $f\bar{a}'$ で転写されているのに対して、ヒヨスの項では $b\bar{a}'$ で転写されている。これが意図的なものであるかは直ちに判断することはできないが、両写本で表記が統一されていることから、伝承されたフナインの元々の翻訳でもこうした違いが見られたと考えられる。

【表3 エーピアロスのアラビア語表記（『薬草の書』）】

		『薬草の書』		
卷	版	M 写本*	P 写本	Dubler and Terés 版
III: [53]		ايفيالس	انفيالس	ايقيالس
IV: [68]		اسالس (s. p.)	انيالس (ut vid.)	يبيالس

筆者作成

2.2.『熱病の種類について』

Wernhard はフナインによる原翻訳から生じた β 写本を想定し、エスコリアル図書館所蔵の三種類の写本、L 写本、Majlis 写本の間を図2のように表した⁵⁴。彼は、写本の記述の対比から S 系統の写本が二つの底本 (γ と δ) を対照して作成された翻訳であり、L 写本とは早い段階から系統が分化したと主張している⁵⁵。

以上を踏まえて、『熱病の種類について』におけるエーピアロスの転写について議論を進めたい。まず、de Stefani は全体を通してエーピアロスを ايببيالس と校訂している。これは先に議論した『薬草の書』におけるパリ写本に見られる転写と同じものである。そして、彼が底本とした写本の中でこの形で書かれているのは、L 写本で1箇所、Majlis 写本で1箇所の計2箇所である。裏を返すと、『熱病の種類について』で言えば、彼の採用した以外の表記が相当数あることを意味している。

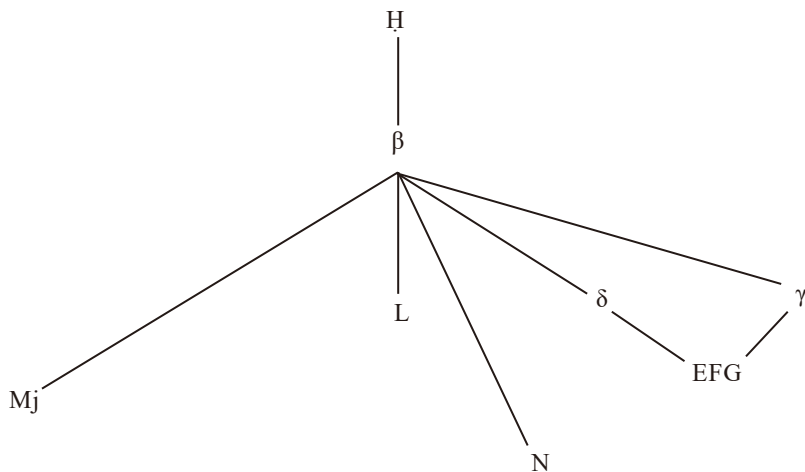
⁵⁴ 図内の E、F、G はそれぞれ de Stefani 版における S1、S2、S3に相当する。

⁵⁵ Wernhard, *Über die Arten der Fieber*, XL.

表4に『熱病の種類について』におけるエーピアロスのアラビア語表記をまとめた。各文献での登場箇所を行に記し、文献ごとのエーピアロスのアラビア語表記を示した。

まず H1では、写本によって二種類のバリエーションが存在する。一つは L 写本と Mj 写本、S3における **ايبيالس** という表記である。この表記はギリシア語原典における格変化が無視され、かつ母音を明確にするための文字も挿入されていない。それに対して、S1と S2では **ايقيالس** と表記されており、単語末の *lām* と *sīn* の間に *yā'* が挿入されている。これは何を意味しているのか。

【図5 『熱病の種類について』写本系統図】



注記：Wernhard, *Über die Arten der Fieber*, XL より引用。ただし本稿での表記に合わせて Majlis 写本を Mj と表記した。

仮にこの *yā'* が *lām* とともに発音される母音を示しているものであるとするなら、表1を基準にすると η、ι、υ のいずれかの転写であると考えられる。その場合、ギリシア語でのエーピアロスの語尾は λης、λις、λυσ のいずれかになる。しかし、これらの語尾は、男性名詞であるエーピアロスの活用形には存在しない形であり、したがって、この *yā'* がギリシア語の活用語尾を反映して挿入された可能性は、非常に低い。

次に第二の可能性が、「転写の過程で *sīn* の一部が *yā'* と誤読されたため、挿入された」というものであり、これが最も妥当な説であろう。これは、これらの文字が連続すると、しばしば文字の境目が曖昧に書かれるためである。しかし、本稿で考えたいのはその理由である。真っ先に思いつくのは、直後の *sīn* を書いた際に誤って山型が四つになったことで、それが *yā'* として解釈され、継承されたというものである。この可能性は完全に否定しうるものではないが、それでもそこに *yā'* を当ては

めた理由を探る必要がある。

その手がかりとなるのが、先述の『葉草の書』第3巻53節でのエーピアロスの転写である。そこでは転写された *lām* に対して *i* の母音を示すカスラが併記されていた。これは当時、エーピアロスの語尾の読み方が“-lis”として理解されていた可能性を示すものである。つまり、当時の人々にとって、エーピアロスの語尾は -lis として読むのが一般的であったため、ギリシア語由来の語彙であるエーピアロスの *lām* と *sīn* の間に山型の文字があれば、母音が *i* であることを強調するために *yā'* が挿入されていると解釈したと推察できる。

【表4 エーピアロスのアラビア語表記（『熱病の種類について』）】

版 箇所	『熱病の種類について』				
	L	Mj	S1 (E)	S2 (F)	S3 (G)
H1	إيبالس (s. p.)	ايبالس	ايقاليس	ايقاليس	ايبالس
H2-1	ايباليوس	ايبالس	انقيالس (del.)	انقيالس	انقيالس (s.p.)
H2-2	ايباليوس	ايبالس	انقياليس	انقيالس (ut vid., s. p.)	انقياليس
H3	ايبالس	ايبالس (s. p.)	ايقاليس	ايقالوس	انقيالس

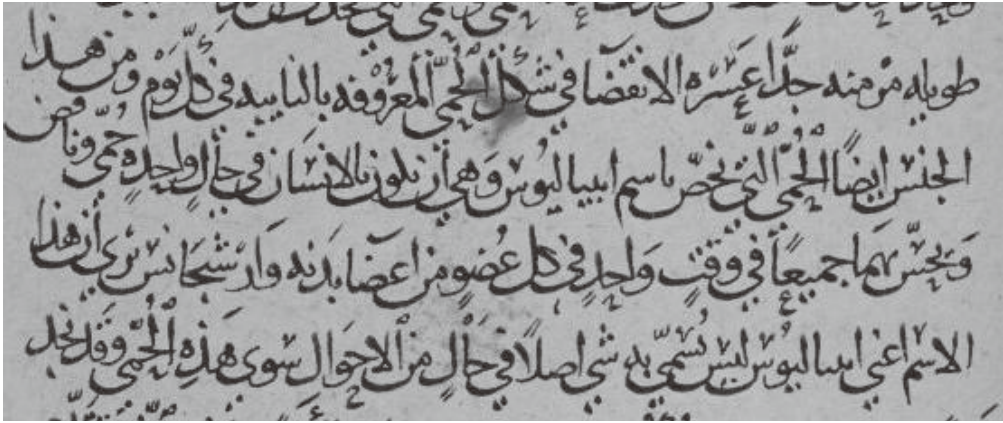
筆者作成。各表記は de Stefani 版に従った⁵⁶。

話を戻して H2-1と H2-2の転写の分析を行う。この二つは連続した箇所であるため、多くの写本で表記が共通している。まず Mj 写本では *ايبالس* と転写されており、 π は *bā'* で置き換えられ、語尾の母音を示さない H1と同じ表記である。続いて L 写本（図3）を見ると、*ايباليوس* と転写されており、Mj 写本とは π の表記法において共通しているが、語末に注目すると、*lām* と *sīn* の間に *yā'* と *wāw* が挿入され、*yā'* の上部には *u* の母音を示すダンマが記されている。この転写法の詳細は後述する。

S1写本と S3写本では、*انقيالس* という表記で一致しており、S2でも、この転写の亜種である *انقياليس* と表記されている。この三つの写本では *yā'* が *nūn* と転写されていたり、*fā* に相当する部分が *qāf* に置き換えられていたり、伝承の過程で誤読された結果、原語での発音が反映されていない転写が確認できる。

⁵⁶ Wernhard は S1、S2、S3での *qāf* に当たる部分を *fā'* で校訂している。

【図6 L 写本におけるエーピアロス (H2-1と H2-2)】



注記： Three Medical Treatises by Galen (جالينوس), British Library: Oriental Manuscripts, Or. 6670, f. 170r より一部抜粋。二行目中央と四行目右に *ايبيالوس* がある。

最後に H3におけるエーピアロスの転写を見ていきたい。L 写本では、*ايبيالس* という形で転写されており、また Mj 写本では点が表記されていないものの、文字の形から L 写本と同様の転写であると考えられる。

そしてここでも、これら二つの写本と S1、S2、S3における転写の差異が明確に現れており、さらに H3においては各写本間でも表記が少しずつ異なっている。まず、S1では *انقيالس* と表記されている。これは同写本の H1における転写と一致しており、また H2-2とは、打たれた点の位置が異なることを除けば、単語全体の形も一致している。それに対して S3の H3におけるエーピアロスは H2-1と同じく、*انقيالس* という形で転写されており、H2-2の *انقيالس* という表記とも酷似している。

H3において興味深いのは、S2における *ايقيالوس* という表記である。というのも、この *lām* と *sīn* の間に *wāw* を含む表記は、S2と写本系統上で関係を持たないとされる L 写本 H2-1と H2-2の表記にも見られる。

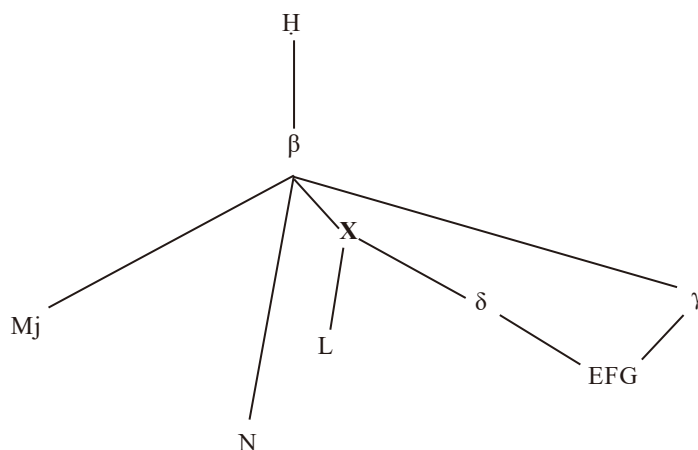
L 写本における *ليوس* という表記は、参照した範囲では、H2-1と H2-2の二箇所でのみ確認できる。Dubler and Terés による転写規則に従えば、*yā'* と *wāw* によって表される母音は多岐にわたるが、ギリシア語での当該箇所は単数対格形の *ἡπιάλον* であり⁵⁷、原典の音を表したものでもない。したがって、これは L 写本が基にした写本の表記をそのまま写し取ったものであると考えられる。一方の S2写本は Wernhard が提示した系統図に従えば、S1や S3と共通する *γ* と *δ* という仮の底本から作成された。つまり、L 写本と S2写本で共通している写本は、*β* 写本しかない。*β* 写本での H3の表記が *yā'* と *wāw* を含むものであったとも考えられるが、他の写本に同様の表記が見られないことから可能性が低い。なぜなら Wernhard の主張を前提として、本稿が参照した5つの写本が *β* 写本を基に派生したとするなら、その派生した写本の中に、

⁵⁷ Galen, *De differentiis februm*, VII 349K.

wāw を含む写本が一定数存在するはずだからである。それならば、どのようにして wāw を含む転写が生まれたのか。

一つ考えられる仮説が、実際には Wernhard による系統図には現れていないエーピアロスの語尾が **لوس** と転写された写本 X が、L 写本と γ あるいは δ 写本の共通の底本として存在し、写本 X が伝承される過程で lām と wāw の間に yā' が誤って挿入された転写が現れて、それが L 写本に伝わったとするものである。こう考えれば、L 写本と S2 写本にのみ wāw が挿入された形が現れることを説明しうるだろう。この仮説を踏まえて、図3に Wernhard による系統図に写本 X を加えた系統図を示した。ここでは、 γ と δ のどちらが写本 X から派生したものかを判断できないため、仮に δ 写本を写本 X から派生したものとした。

【図7 写本 X を加えた『熱病の種類について』の写本系統図】



注記：筆者作成。線の長さは写本が成立した時系列を示すものではない。

結論

ここまで、熱病エーピアロスのアラビア語転写のバリエーションについて『薬草の書』および『熱病の種類について』を例に取り、その類型化を試みた。その結果エーピアロスのギリシア語からアラビア語転写においては、次の二つの基準を基に分類できた。

第一に、ギリシア語の π の転写を基準とするものである。『薬草の書』においては、ギリシア語 $\eta\pi\acute{\iota}\alpha\lambda\omicron\varsigma$ に含まれる π はアラビア語で、fā' もしくは bā' に置き換えられることがすでに明らかになっていたが、『熱病の種類について』でも二つの文字で置き換えられていた。しかし後者の場合、どちらの文字を用いるかは写本によって異なり、また同一の写本内でも両方が併存するものもあった。両文献ともフナインによる翻訳であることを考慮すると、早い段階からエーピアロスの転写にバリエーションがあったことは明らかである。

第二に、エーピアロスの活用語尾に相当する箇所の転写による分類である。アラビア語に翻訳されたギリシア語の文献では、原語の格変化が無視され、主格で統一されることは珍しくなかった。エーピアロスの場合にもそれは当てはまり、アラビア語の転写において格変化を明確に示さない **لس** という表記が最も多かった。この表記がされる写本の中には、**lām** とともに **i** の母音を示す記号が添えられているものがあった。このことから中世のある時期には **lām** とともに読まれる母音は、ギリシア語の元々の音に近い **u** ではなく **i** であり、それを反映した **ليس** という表記が生まれた可能性を指摘した。

さらに類型化によって **wāw** を含む転写が非常に特殊な例であることが明らかになった。この表記は、先に挙げた **لس** や **ليس** といった形から派生したとは考えにくく、先行研究では想定しなかった別系統の写本が存在する可能性を示唆するものであった。

本稿の結論に代わり、表5にエーピアロスの各写本における転写の類型を示した。全体的には π を **fā'** で転写し **lām** の母音を無表記とする場合が最も多く、 π を **bā'** で転写し、かつ **lām** の母音が無表記のパターンがそれに続く。ここで行った分類が今後写本の系統図を検証する一助になることが期待される。

【表5 エーピアロスの各写本における転写の類型】

π の転写 1 の母音	fā'/(qāf)	bā'
無表記	P(III:[53]) S1(H2-1) S2(H2) S3(H2-1)	M(IV:[68]) P(IV:[68]) L(H1, H3) Mj(全て) S3(H1)
i	M(III:[53])	N/A
ī	S1(H1, H2-2, H3) S2(H1) S3(H2-2, H3)	
wāw	S2(H3)	N/A
yū (ou)	N/A	L(H2-1), L(H2-2)

筆者作成

文献目録

【写本史料（アラビア語）】

Dioscorides (Diyūsqūrīdīs), *De materia medica*.

M = al-maḳālāt al-sab' min kitāb Diyāsqūrīdūs wa huwa hayūlā al-ṭibb fī al-ḥushā'ish [sic.] wa al-sumūm. Madrid, MSS/5006, Biblioteca Nacional de España, before 1210.

<<http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000198913&page=1>> [accessed 14 March 2021].

P = Le traité des plantes, traduction d'Étienne, revue par onāin ibn Isāq, pour Moammad ibn Moūsā. MS arabe No. 2849, Biblioteca National Frans. Département des Manuscrits, 1219. <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8406174k>> [accessed 14 March 2021].

Galen (Jālīnūs), *De differentiis febrium*.

L = *Kitāb Jālīnūs fī aṣnāf al-ḥummāyyāt*. Three Medical Treatises. British Library: Oriental Manuscripts, Or. 6670, in Qatar Digital Library. <https://www.qdl.qa/archive/81055/vdc_100000005112.0x000001> [accessed 13 March 2021].

【一次史料（アラビア語）】

Dioscorides (Dīyasqūrīdīs). *La versión árabe de la 'Materia Médica' de Dioscórides (texto, variantes e índices)*. Serie: *La 'Materia médica' de Dioscórides, Transmisión medieval y renacentista*. Edited by C. E. Dubler and E. Terés. Vol. II. Tetuán y Barcelona, 1952–1957.

Galen (Jālīnūs). *Kitāb aṣnāf al-ḥummayāt; De differentiis febrium libri duo arabice conversi*. Edited by C. de Stefani. Pisa: Fabrizio Serra Editore, 2011; *Über die Arten der Fieber: in der arabischen Version des Hunayn Ibn Isḥāq*. Edited and Translated by Wernhard M. Dissertation, München: Ludwig-Maximilians-Universität, 2004).

Ibn Sīnā. *Qānūn fī al-ṭibb*. [Rome] Rome: Typographia Medicea, 1593, In Saab Medical Library. <https://lib-webarchive.aub.edu.lb/BorreLudvigsen/https://almashriq.hiof.no/ddc/projects/saab/avicenna/896/html/S2_023.html> [accessed 31 March 2021]; [Baghdad] 3 vols. Baghdad: Maktaba al-muthannā, 19--; [Gruner]: *A Treatise on the Canon of Medicine of Avicenna: Incorporating a Translation of the First Book*. Translated by O. C. Gruner. New York: AMS Press, 1973 (repr. Originally published: London: Luzac, 1930); [B-D] *The Canon of Medicine (al-Qānūn fī'l-ṭibb : The Law of Natural Healing)*. Translated by H. Doostdar. Edited by L. Bakhtiar. Vol. 4., Tehran: Safir Ardehal, 2014; [Latin]: *Liber canonis*. Translated by Alpagus. Tehran: Imperial Organization for Social Services, 1976 (repr. Originally published in 1556).

al-Rāzī, Abū Bakr Muḥammad ibn Zakarīyā'. *Kitāb al-ḥawī fī al-ṭibb*. Vol. XVI. Hyderabad al-Dakkan: Maṭba'at Majris Dā'irat al-Ma'ālif al-'Uthmāniyah, 1963.

【一次史料（ギリシア語）】

Dioscorides. *De materia medica*. Edited by M. Wellmann. 3 vols. Berolini: Weidmann, 1906–1914; [English]: *De materia medica*. Translated by L. Y. Beck. Hildesheim:

Olms-Weidmann, 2005.

Galen. *De caussis morborum*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. VII, 1–41. Leipzig: Cnoblochii, 1824.

—. *De crisis*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. IX, 550–768. Leipzig: Cnoblochii, 1825.

—. *De diebus decretoriis*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. IX, 769–941. Leipzig: Cnoblochii, 1825.

—. *De differentiis februm*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. VII, 273–405. Leipzig: Cnoblochii, 1824.

—. *De inaequali intemperie*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. VII, 733–752. Leipzig: Cnoblochii, 1823.

—. *De medendi method ad Glauconem liber primus*. In *Claudii Galeni Opera omnia*, Edited by C. G. Kühn. vol. XI, 1–70. Leipzig: Cnoblochii, 1826.

—. *De morborum differentiis*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. VI, 836–880. Leipzig: Cnoblochii, 1823.

—. *De symptomatum caussis*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. VII, 85–272. Leipzig: Cnoblochii, 1824.

—. *De symptomatum differentiis*. In *Claudii Galeni Opera omnia*. Edited by C. G. Kühn. vol. VII, 42–84. Leipzig: Cnoblochii, 1824.

Hippocrates. *De aere, aquis, locis*. In *Oeuvres complètes d'Hippocrate: traduction nouvelle avec le texte grec en regard, collationné sur les manuscrits et toutes les éditions*, Edited and Translated by É. Littré. Vol. II, 12–93. Paris: J. B. Baillière, 1840.

—. *De epidemiae liber primus*. In *Oeuvres complètes d'Hippocrate: traduction nouvelle avec le texte grec en regard, collationné sur les manuscrits et toutes les éditions*, Edited and Translated by É. Littré. Vol. II, 530–717. Paris: J. B. Baillière, 1840.

—. *De superfoetatione*. In *Oeuvres complètes d'Hippocrate: traduction nouvelle avec le texte grec en regard, collationné sur les manuscrits et toutes les éditions*. Edited and Translated by É. Littré. Vol. VIII, 472–509. Paris: J. B. Baillière, 1853.

【二次資料】

Bergsträsser, G. *Hunain ibn Ishāq über die syrischen und arabischen Galen-Übersetzungen*. Leipzig: Brockhaus, 1925.

—. *Neue Materialien zu Hunain ibn Ishāq's Galen-Bibliographie*. Leipzig: Brockhaus, 1932.

Browne, E. G. *Arabic Medicine*. New Delhi: Goodword Books, 2002.

Bynum, W. F., and Nutton, V. (ed.). *Theories of Fever from Antiquity to the Enlightenment*. London: Wellcome Institute for the History of Medicine, 1981.

Dols, M. W. *Medieval Islamic Medicine: Ibn Riḍwān's Treatise "On the prevention of*

- Bodily Illness in Egypt*". Arabic text: Edited by A. S. Gamal. Translated by M. W. Dols. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1984.
- Gutas, D. *Greek Thought, Arabic Culture: The Graeco-Arabic Translation Movement in Baghdad and Early 'Abbāsid Society (2nd–4th/8th–10th centuries)*. London: Routledge, 1998; 山本啓二訳『ギリシア思想とアラビア文化—初期アッバース朝の翻訳運動—』勁草書房, 2002.
- . *Avicenna and the Aristotelian Tradition: Introduction to Reading Avicenna's Philosophical Works*. 2nd, rev. and enl. ed., incl. an Inventory of Avicenna's Authentic Works. Leiden: Brill, 2014.
- Kahl, O. *The Sanskrit, Syriac, and Persian Sources in the Comprehensive Book of Rhazes*. Leiden and Boston: Brill, 2015.
- Mattern, S. P. *Galen and the Rhetoric of Healing*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008.
- . *The Prince of Medicine: Galen in the Roman Empire*. New York: Oxford University Press, 2013; 澤井直訳『ガレノス—西洋医学を支配したローマ帝国の医師—』白水社, 2017.
- Montgomery, S. L. (2000). *Science in Translation: Movements of Knowledge through Cultures and Time*. Chicago: University of Chicago Press; 大久保友博訳.『翻訳のダイナミズム—時代と文化を貫く知の運動』. 白水社, 2016.
- Nutton, V. (2004). *Ancient Medicine*. London: Routledge.
- Pormann, P. E., and E. Savage-Smith. *Medieval Islamic Medicine*. Washington D.C.: Georgetown University Press, 2007.
- Renaud, H.-P.-J., and Derenbourg, H. *Les Manuscrits arabes de l'Escorial*. Vols. II, Fasc. 2. Paris: P. Geuthner, 1941.
- Riddle, J. M. *Dioscorides on Pharmacy and Medicine*. Austin: University of Texas Press, 1985.
- Rosental, F. *The Classical Heritage in Islam*. London: Routledge, 1975.
- Sadek, M. *The Arabic Materia Medica of Dioscorides*. Québec: Les Éditions du Sphinx, 1983.
- Sajadi, M. M., R. Bonabi, M.-R. M. Sajadi, and P. A. Mackowiak. "Akhawaynī and the First Fever Curve." *Clinical Infectious Diseases*, 55, no. 7 (2012): 976–980.
- GAS = Sezgin, F. *Geschichte des arabischen schrifttums: Medizin–Pharmazie–Zoologie–Tierheilkunde bis ca. 430H*. Vols. III–VII. Leiden: E. J. Brill, 1970–1979.
- Siegel, R. E. *Galen's System of Physiology and Medicine: An Analysis of His Doctrines and Observations on Bloodflow, Respiration, Humors, and Internal Diseases*. Baser; New York: Karger, 1968.
- Ullmann, M. *Die Medizin im Islam*. Leiden: E. J. Brill, 1970.

- van der Eijk, P. J. *Medicine and Philosophy in Classical Antiquity: Doctors and Philosophers on Nature, Soul, Health, Disease*. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- Vinay, J.-P., and J. Darbelnet. *Comparative Stylistics of French and English: A Methodology for Translation*. Edited and Translated by J. C. Sager and M.-J. Hamel. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, 1995.
- Yeo, I. S. “Hippocrates in the Context of Galen: Galen's Commentary on the Classification of Fevers in Epidemics VI.” In *Hippocrates in Context: Papers read at the XIth International Hippocrates Colloquium University of Newcastle upon Tyne 27–31 August 2002*, Edited by P. J. van der Eijk, 433–443. Leiden–Boston: Brill, 2005.
- Yildirim, R. V. “Studies on De Materia Medica of Dioscorides in the Islamic era.” *Asclepio*, no. 65 (2013): 1–7.
- 前嶋信次『アラビアの医術』中央公論社, 1965.

【辞書・事典】

- EI2 = Gibb, H. A. R., et al. (ed.). *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed. 12 vols. Leiden: Brill, 1960–2004.
- OCD = Hornblower, S., and A. Spawforth. (ed.). *Oxford Classical Dictionary*. 3rd. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- ODB = Kazhdan, A. P., Alice-Mary Talbot, Anthony Cutler, Timothy E. Gregory, and Nancy P. Sevenko. (ed.). *The Oxford Dictionary of Byzantium*. III vols. New York and Oxford: Oxford University Press, 1991.
- 大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002.

【図版】

- 図1 “al-maḡālāt al-sab‘ min Kitāb Diyāsḡūrīdūs wa huwa hayūlā al-ṭibb fī al-ḡ-shā’ish wa al-sumūm,” Biblioteca nacional de España: MSS 5006, f. 67r. <<http://bdh.bne.es/bnearch/detalle/bdh0000198913>> [accessed 26 March 2021].
- 図2 “Le Traité des plantes de Dioscoride, traduction d’Étienne, revue par Ḥonāī n ibn Ishāq, pour Moḡammad ibn Moūsā,” Bibliothèque nationale de France: Département des Manuscrits, Arabe 2849, f. 65v. <https://www.qdl.qa/archive/81055/vdc_100000005112.0x000001> [accessed 30 March 2021].
- 図3 “al-maḡālāt al-sab‘ min Kitāb Diyāsḡūrīdūs wa huwa hayūlā al-ṭibb fī al-ḡ-shā’ish wa al-sumūm,” Biblioteca nacional de España: MSS 5006, f. 91r. <<http://bdh.bne.es/bnearch/detalle/bdh0000198913>> [accessed 26 March 2021].
- 図4 “Le Traité des plantes de Dioscoride, traduction d’Étienne, revue par Ḥonāī n ibn Ishāq, pour Moḡammad ibn Moūsā,” Bibliothèque nationale de France: Département des Manuscrits, Arabe 2849, f. 89r. <<https://www.qdl.qa/arch>

ive/81055/vdc_100000005112.0x000001> [accessed 30 March 2021].

- 図6 “Three Medical Treatises by Galen (جالينوس)”, British Library: Oriental Manuscripts, Or 6670, f. 170r. in *Qatar Digital Library* <https://www.qdl.qa/archive/81055/vdc_100000005112.0x000001> [accessed 26 March 2021].

転写表記：岩波書店『イスラーム辞典』